

配布資料 A

私は2つの記事を読んで、[Climategate 事件—地球温暖化説の捏造疑惑]および[続 Climategate 事件—崩れゆく IPCC の温暖化神話]の意見のほうが、私自身の意見に近いと感じる。その理由は2つある。

一つは、二酸化炭素排出量と地球の温度とを示したグラフに、明らかに対応しない箇所があるということである。対応しないとしてもほんの短い期間のことであれば無視できるが、グラフによると、かなり長い期間において対応していないことが分かる。このことから、後にも示すが、全体的に見て二酸化炭素排出量と地球の気温に比例関係がみられるのは、すす(炭素)量の増加による二酸化炭素生成により、二酸化炭素排出量が増加したように見えることによるものだと考えられる。

もう一つは、[地球温暖化の考え方]で示されているように、すす(炭素)が地上気温を上げることに影響しているということである。私は、人間が排出する二酸化炭素自体が直接的に地球温暖化に影響を及ぼしているのではなく、火山活動や人間の活動により排出されたすす(炭素)がエアロゾルとして地球気温の上昇に影響を及ぼしていると考え。そうすれば、地球気温の上昇と二酸化炭素排出量に比例関係がみられるのは、空気中に舞うすす(炭素)と空気中の酸素が反応を起こして二酸化炭素に変化しているからだと考えることができる。

これらの理由から、私は、地球温暖化と二酸化炭素排出量との間には、大きな関係はないと考える。

このことから、私は、自動車や工場、発電所からのすす(炭素)の排出量を減らすことが、地球温暖化を抑止することにつながると考える。例えば、自動車であればハイブリッド車や電気自動車を普及させたり、発電であれば太陽光や風力、潮力による発電を増やしたりすることで、すす(炭素)の排出量は減らせると考える。これらを実現させるには、企業や政府の開発・普及努力だけでなく、私たちの消費活動も大きく関係している。私たちが環境負担の少ない製品を選ぶグリーンコンシューマーとなることで、環境に低負担の製品やクリーンエネルギーの需要が高まり、企業や政府の開発・普及意欲がより高まる。これを繰り返していけば、すす(炭素)などのエアロゾルによる地球環境への負担は、格段に小さくなると考えられる。

コメント [1]: 「目的」と「範囲」が必要。第三者にわからない。

コメント [2]: 情緒的。

コメント [3]: どっちの記事について？

コメント [4]: 定量的に

コメント [5]: 論理に飛躍がある。

コメント [6]: 本当に生じる反応か？

コメント [7]: 結論は最初に

コメント [8]: 論理展開が単調。場合分けが必要ではないか？